

聖書:ホセア書2章1～13節

説教:わたしの民、あわれまれる者

はじめに

前回のことを簡単に振り返ります。紀元前760年、北イスラエルに住んでいたホセアは、主から姦淫の女ゴメルを妻としなさいと言われ、生まれてきた三人の子どもたちの名前も、罪を思い起こさせる名前をつけなさいと命じられました。なぜかと言えば、北イスラエルが姦淫の罪を犯したがゆえだということです。具体的に言えば、バアルと呼ばれる異教の神々を拝み、道徳は乱れ、正しいことは曲げられ、不正がはびこり北イスラエルの王であったアハブは、妻イゼベルと結託して信仰者であったナボテに罪をかぶせて殺し、ナボテの畑を力尽くで奪い取るという事件が起きた。このことからおよそ百年経ったホセアの時代になっても、神はこれを忘れず、イスラエルを罰するのだと言うのです。今日の箇所でも、神は姦淫とか淫行という激しいことばを使いながら徹底的にイスラエルの罪を責め立てています。

1 神とイスラエル

1) なぜバアルを慕ったのか

4節から5節前半。「彼女の子らを、わたしはあわれまない。彼らは姦淫の子らだから。彼らの母は姦淫を行い、彼らをはらんで恥をさらした。」

「彼女」とはイスラエルのことで、「彼女の子ら」とはイスラエルの民たちのことです。イスラエルが真の神を捨ててバアルの神の下に走って行ったことを姦淫と呼び、バアルのことを愛人と呼んでいます。

バアル神は、もともとカナンで古くから農業の神として信仰の対象とされてき神でした。日本でも同じような神に、お稲荷さんというものがあります。私が生まれ育った村にも、稲荷神社が祀られていて村を見おろすことのできる小高い山の上に祀られて、秋になるとそこでお祭りをしていました。

ここで単純な疑問が思い浮かびます。なぜイスラエルは聖書の神を捨ててバアルの神々を拝むようになったかです。答えは5節後半に書いてあります。「私の愛人たちの後について行こう。彼らはパンと水、羊毛と麻、油と飲み物をくれる。」イスラエルは、10月から数ヶ月間は雨の季節がありますが、それらもわずかな量で、それ以外はまったく雨が降りません。ですから雨が降らなければ飢饉になってしまう。そういうことがしばしば起

こった。そうするとどうなるか。聖書の神は役に立たない。バアルは雨を降らせて豊作にしてくれるに違いない。そんなふうに思って、愛人たちの後について行った。これがバアルに走った理由です。

2) 神の祝福とのろい(申命記28章)

ではなぜ神は雨を降らせなかったのか。神の気まぐれでしょうか。もしそうならバアルを慕ったのも無理はない。でも、もう少し根本に遡る必要があります。そもそも神はどのような約束をしておられたのか。そこから確認しなければなりません。

申命記28章で神はイスラエルに対する祝福とのろいを語っていました。まとめればこういうことです。まず祝福から。「もし神、主の御声に聞き従い、主のすべての命令を守るなら、あなたは町にあっても祝福され、野にあっても祝福される。」つまり豊かな収穫を得ることができるという(申命記28章1, 3節)つぎにのろい。「もし神、主の御声に聞き従わず、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、あなたがたは町にあつてもものろわれ、野にあつてもものろわれる。」つまり先ほどの反対に、雨が降らず干ばつになり作物は実らないということです。このことから、なぜイスラエルに雨が降らず、しばしば飢饉に襲われた理由がはつきります。神が意地悪したのではない。その反対です。人間の方が神との約束を破って、主の御声に聞き従わなかったから。その結果、雨が降らなくなってしまった。

3) もし立ち返っていたならば

では、イスラエルは本当はどうすれば良かったのでしょうか。自分たちがなにをしてきたのか、振り返るべきでした。自分たちは神の御声に聞き従わず約束を破り、その結果、神ののろいを受けたのだと自覚すべきでした。もしそこで罪を悔い改めて、もう一度神に立ち戻っていたなら、神は再び雨を降らせていたはずで。ところが、イスラエルはなおも頑なでした。自分の罪を悔いどころか、神を見捨ててバアルを拝んでいった。これがイスラエルのしたことだったのです。

2 人

1) 自分のことは棚上げにするけれど

この夏は異常な暑さが続いています。専門家は、この暑さは地球温暖化の影響によるもので、これから異常に暑い夏が繰り返してくるだろうと言っています。世界を見渡せば、ガザでは食べるものがなくなり、痩せ細った子どもたちの写真がニュースで映し出されています。ロシアとウクライナの戦争も、すぐに終わるとはとても思えません。80年前、原子爆弾を搭載したB29爆撃機がテニアン島から飛び立ち、広島と長崎に住んでいた人たちが焼き殺されました。そのテニアン島に住んでいた大宮司姉は、アメリカ軍が上陸して来たとき、家族が目の前で殺されていくのを見なければなりません。なぜこのような悲惨な戦争が繰り返されていくのか。神は愛ですと言うならば、神は戦争を止めるべきである。でも止まらない。だから聖書の神はどこにもいないと言いたくなるのも無理はありません。しかし問題の本質はどこにあるのでしょうか。自分のことは棚に上げて「悪いのは神である」と言うのは簡単ですが、よく考えなければなりません。

2) だれが与えてくれたのか

私たちがいま手にしているもの、持っているもの、もともとだれのものだったのでしょうか。みな言うでしょう。「全部、自分のお金で買ったもので自分のものです。だから自分が好きなようにして何が悪いのか。」このことばは、罪に関して二つのことを表現している

一つ目は、全部自分のものであるという考え方の問題。聖書はこう言うのです。8節後半。「このわたしが、穀物と新しいぶどう酒を彼女に与えた。わたしが銀と金を多く与えた。」先ほども見たとおり、雨を降らせるかどうかは神の主権にあります。穀物が豊かに実るのは、神が雨を降らせてくださったおかげであって、決して自分の力によるものではありません。ところが人はそのことを忘れて、自分の力で手に入れたものだと思い込む。バアルという神は拝んでいないかもしれませんが、自分を神であるかのように考えて、これは自分ののだと言い張る。これが一つ目の罪。神が与えてくださったとは認めませんから、当然神の対して感謝はありません。ますます傲慢になるだけ。これが二つ目の罪です。この世界に、異常気象や戦争のような悪がなくなるのはなぜか。非常に簡単です。本当の神を忘れ、自分を神とし、その結果、神からののろいを受けた結果だった。

3 神

1) 裏切られても

そんなことをしている人間に神はどうされているのでしょうか。6, 7節。「それゆえ、わたしは 茨で彼女の道に垣根を巡らし、彼女が通い路を見つけないように 石垣を積む。彼女は愛人たちの後を追っても、追いつけない。彼らを捜し求めても、見つけられない。彼女は言う。『私は初めの夫のところに戻ろう。あのころは今よりも幸せだったから』と。」

通い路とは、愛人のもとに通う道のことです。夫に見つからないように暗がりでも安全に歩ける道、そんな道を昼間の間にこっそりつくっておくわけです。しかしあるとき神はその通い路に垣根を巡らし、石垣を積んで歩けなくしてしまう。そうやって妻が愛人のもとに通えなくなるようにするというのです。ここで、妻というのはイスラエルのことで夫は神ご自身のことです。夫である神は、妻が夜家を出てどこへ行くのかをちゃんと知っている。そのときの夫の気持ちはどうなのでしょう。「妻は妻、私たちは私。妻の行動には干渉しません」と言うはずはない。神は、妻であるイスラエルを熱烈に愛していますから、嫉妬の炎を燃やします。神が嫉妬すると聞いてびっくりするかもしれませんが、妻が愛人の所に行っても嫉妬しない人がいるのでしょうか。もしそんな夫がいるとしたら、もはやそれは夫婦とは呼べないでしょう。

2) 立ち返るのを待つ

イスラエルを愛するがゆえに、嫉妬の炎は激しく燃え上がり、強いことばでイスラエルを責めます。2節後半。「その顔から淫行を、その乳房の間から姦淫を取り除け。」ことばだけではない。実際の行動に出ます。茨で垣根を巡らし、石垣を積んで愛人のところに行けなくする。そのようにして、バアルに心を引かれて罪を繰り返しているような妻であっても、なお神は妻を見捨てず、いつかもとの夫のところに立ち返ってくれると期待している。その期待のことばが7節後半です。「私は初めの夫のところに戻ろう。あのころは今よりも幸せだったから。」

3) 赦し

しかしどうでしょうか。姦淫をしてきた妻が、自分の罪を悔い改めたとしても、夫のところにすぐに戻れるものなのでしょうか。自分のしてきたことを思えば思うほど、恥ずかしくてとても戻れません。たとえ一緒の家に住むようになったとしても、「お前はわたしにひどいことしてきた妻だ」

と過去のことを掘り返してじくじくと責め立ててくるようなら、戻らなかったほうがよっぽどましでしょう。本当に赦してくれるのだろうか。

大丈夫です。神に限って言えば、神は私たちが犯した過去の罪について、責め立てるようなことはなさいません。1節にこうあります。「言え。あなたがたの兄弟には、「わたしの民」と。あなたがたの姉妹には、「あわれまれる者」と。」これほどの罪を犯したのにもかかわらず、「わたしの民」と呼び、神のあわれみによってイエス・キリストと呼ばれる方を与えて、この方を信じるならばその罪を一切赦すと約束してくださいます。このようにしてくださるのですから、私たちはすべてのことをゆだねて父なる神とイエス・キリストとともに歩んでまいります。